ハレンチなトレンチコート

ミズキシホ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハレンチなトレンチコート

【Ｎコード】

Ｎ７１９３Ｃ

【作者名】

ミズキシホ

【あらすじ】

トレードマークは、トレンチコート。

「ヨシ！　分かった！」

「皆さん、今日お集まりいただいたのは……。
この中に犯人がいるのです……！」

「その人物は、実に巧妙なやり方で……。」

――言ってみてぇよなぁー、そんなセリフ……。

俺、櫻井順平。
職業、探偵。

子供の頃読み漁った探偵小説に心酔し、
傾倒し、
将来の夢は探偵になること、と恥ずかしげもなく言い放ち、
親は涙し、
周囲は失笑していた。

そして、宣言通り、俺は探偵になった。

子供の頃の夢を叶えた、と言う意味では、
俺みたいなヤツは、なかなかいないかもしれない。

嵐の山荘に閉じ込められ起きる密室殺人、
手毬歌に隠された謎、

血染めのダイイングメッセージ、
送られてきた三粒のオレンジの種が意味すること、
挑戦状を送りつけてくる怪人、
鵺の鳴く晩に起きることとは……？

――そのどれひとつとしてありゃしねぇ。

虫眼鏡片手に地面を這いずり回る俺。

「む、こ、これは……！

これは犯人の痕跡。

犯人の決定的なミス！」

俺は内心の興奮で口許が緩みそうになる気分を抑え、わざと眉をひそめる。

――やっぱ探偵はクールじゃねぇとな。

「……、警部、みなさんを広間に集めてください。

謎はすべて解けました。」

――ぬぉーーー、かっこええ、俺ーー！

――うわっ、やべっ。

ターゲットが出てきた。

白昼堂々と妄想をしていた俺は、無理矢理現実に引き戻された。

子供の頃の俺が読み漁った探偵小説のように、
密室殺人や猟奇殺人、謎の怪人との対決なんて、
起こり得るわけがないのだ。

百歩譲ってそんな事件が起きたとして、

――俺の出る幕じゃねぇ……。

――甘かった、俺……。
――夢見すぎだったよ、俺……。

妄想を中断する。
俺は、ターゲットを見失わないよう、
付かず離れずで尾行を始めた。

現実の探偵業とはこんなもんだ。
お決まりの浮気調査、素行調査。
最近では、尋ね犬・猫の依頼も多い。
親に叱られてプチ家出をした子供の捜索、って依頼もあった。
まあ、そんな時は大体、避難先は友達の家と相場が決まっている。
チョロイもんだ。

犬・猫の里親を探して下さいってのもあったな。
なんか探偵業としては趣旨が違うが、仕事のえり好みをする余裕は
俺にはない。

――しょせん、俺は町内会の何でも屋なのさ、フッ……。

うちの事務所の大家のババアが、町内会の役員で顔がきくもんだか

ら、
あれやこれやとしょーもない仕事を運んでくる。
まあ、背に腹は変えられない俺にとっては、
ありがたいにはありがたいんだが……。
こないだもこうだ。
「櫻井さんちょっと、アンタ、仕事だよ。
3丁目の鈴木さんとこの、玄関先においてた鉢植えが盗まれたんだってさ。」
「おー、犯人探しかよ。
ババア、やるなー、さすがだよ。
やっと仕事らしい仕事持ってきたじゃないか。」
「バカだねアンタ、話は最後まで聞くもんだよ。
犯人は分かってんのよ。
隣の佐々木さん。」
「なんだよ、犯人分かってんなら、俺の出番じゃねーだろーが。」
「隣同士なんだよ?
佐々木さんとこに、ピンポーン、って訪ねて行ってさ、
『鉢植え返してください』って言えると思うのかい?」
「じゃー、何か? そこで俺が間に入って円く収めろと?」
「まー、そういうことだよ、がんばんな。」

「ババア、てめぇ、ちったぁまともな仕事持ってきやがれ。」
「誰に向かって言ってんだい？　アンタ、今月の家賃、まだもらってないよ。」
「……。
行って来ます……。鈴木さんち。」
「そうそう、そうだよ、稼いできな！」
――チクショー、ババアめ。
それでも、あのババア、口は悪いが俺のことを好いてくれているらしい。
町内会で顔きかして、こうして仕事を持ってきてくれるからな。
時々晩メシのオカズもくれるし。
持ってくるのは、しょーもない仕事ばっかりだが……。
――ジジババ受け「だけ」はいいんだよな、俺。
くだんの『鈴木さんち鉢植え盗難事件』も、
俺の巧妙かつ絶妙なトークで誰も傷つかずに見事大団円となった。
――さっ、尾行、尾行っと。
今回の仕事内容は、素行調査。
息子がどうも変な女にひっかかっているらしいと心配した母親からだ。

――子離れできねぇんだなー。

――しっかし、それにしてもアチィな……。

天気予報ではここしばらく残暑だとか言っていた。
俺はトレードマークのトレンチコートの襟を立て直した。

――暑くても涼しい顔をしてるのがクールな探偵ってもんよ。

名立たる探偵たち、みなトレードマークがある。
俺は悩んだ挙句、

――探偵は、やっぱ、ハードボイルドだよなぁっ！

ということで、
事務所の開設と同時に、
丸井の月賦でバーバリーのトレンチコートを買った。

トレードマークたるものオールシーズン着るのが筋だ。
実際、夏はクソ暑く、冬は眠ったら死ぬ。

夏場は特に、暑いだけでなく、奇異の目で見られた。
まあ、近頃では町内会の連中は皆慣れっこだから、なんにも言わないが。

春先は、春になると跋扈しだす輩とよく間違えられた。

あとは、年に二・三回、
新しく引っ越してきたばかりのひとが俺のことを知らないもんだから、

通報、職務質問、という成り行きになるぐらいかな。

オマワリも最近では、
「またあなたですか……。」「どうぞお引取り下さい。」
この二言しか発しない。

なかなか効率がよくてよろしい。
自分らの税金の無駄遣いに心を砕いているとみた。

――！　ターゲットが、女に接触。

その様子を、デジタルカメラに収める。
ターゲットは女と連れ立って、近所の廃屋へと消えていった。
その瞬間もカメラに収める。

――クソアチィってのにお盛んなこって。

さて、気は重いが報告に行くとするか。

俺は依頼主の元を訪ねた。

「急ぐと思ったから、現像はしてこなかったけど、画面で確認してくれっかな。

お宅の猫君、やっぱ、あのメス猫と会ってたよ。」

「まあ……。」

絶句する依頼主。
そうだろうそうだろう。

猫を恋人かなんかみたいに溺愛してるからな。
まあ、気の毒だが、ここで目を覚ました方がいいよな。
「奥さん、辛い気持ちは分かるんだけどさ……。」
「櫻井さん、こんな暑い日くらい、トレンチコート脱いだら？」
「へ？
あー、これ？
何言ってんだよ、トレードマークなんだよ、これ？
暑さぐらいで脱いでいられるかよ。
男子たるもの一度決めたことは通すのが筋ってもんだぜ。」
「……、
じゃあさー、ズボンも長いの履いたらどうなの？
トレンチコートに、
短パン、ビーチサンダルっていうのはちょっと……。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7193c/

ハレンチなトレンチコート

2010年10月15日22時56分発行